
光の先導者

パイン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光の先導者

【Nコード】

N9036X

【作者名】

パイン

【あらすじ】

地区大会で負けてしまった先導アイチは、チームQ4だけでなく周りの人からの心がない悪意に精神はすり減り自殺を考えるまでに追い詰められたアイチを誰の手にも届かない場所に送った聖竜。自分たちのせいで居なくなったアイチにひたすら誤りながら許しをこう仲間たち…。

そんな彼らに聖竜は元凶でもある二人にチャンスを与えた。

二人は無事先導アイチを連れ戻すことは出来るだろうか！

序章

今日も負けた…最近負けてばっかだしチームの皆に迷惑をかけてる自分が、情けない。

けど、皆は気にするなと言ってくれたけど雀ヶ森レンさんの言葉に僕は、目の前が暗くなった。

折角地区大会に行けたのに自分のせいで全国大会に行けなかっただけでなく櫛くんが、一勝してくれたチャンスを潰してしまった……僕が、弱いせいで。

何時もは寄るカードキャプタルに行かず歩道を渡る人々をぼんやりと見てふと、「死にたい」と思った時は既に体が動いていた。

けたましく車のクラッシュを鳴らす音が、近づき僕の体は宙に浮いたと思ったら意識を白い光に飲まれていった。

第一章 罪（前書き）

最近ハマってしまったアニメの話を書きたくて連載してしまいました！

無謀な挑戦をするのは勝手だが、連載中の小説書けよと思う人はいるでしょうが、勿論です。

2つ両立するのは思っていたより大変です。↑自業自得）

ちなみにカードファイター・と言う「カード」が付くアニメなのになんな要素は残念ながらありません。↑なに！？）

ですが、頑張つて数人は出します！せめてロイパロは出したいと思つてます。

この度はへボ作者の書いた小説を観覧して下さった方々に感謝します。

皆さんが、また見ていただける小説を頑張つて書きますので見捨てないで暖かい目で見守ってください！

第一章 罪

權視点

あの大会からアイチの様子が、変だ。

おどおどしてるのはいつものことだが、最近暗い顔で俯きがちだ。そのせいか知らないが、カードファイトしても必ず負けてその度に落ち込む姿にアイチの仲間だけでなく三和も心配していた。

表情を変えない俺に葛木だけでなく馬鹿二人が突っかかる。勿論俺も心配してうるが、単に顔に出ないだけだ。

それはともなく俺は偶然にもアイチを見つけた。

しかし様子が、変だ。いつも俺の姿を見れば駆け寄るのにただただ歩道を眺めていた。

いつもなら無視をするが何となく声をかけてみた。

「おい、アイ…」

最後まで言えなかった。アイチの体は車が行き交う歩道に身を投げだしていたからだ。

俺は咄嗟にアイチの腕を掴むと辺りを眩しい光が、目を焼いた。

光輝く白い翼に青と白の体をした女性的な…美しいドラゴンを見たことが、合った。

良くアイチの切り札として召喚されているロイヤル・パロディンたちの神。

「お前は…」

權が、その名を言う前にアイチを抱えたまま消えてしまった。

今までアイチの腕を掴んでいた手は、虚しく空に伸ばされたままだった。

雀ヶ森視点

地区大会でやっと見つけた櫂の隣にいた青髪に蒼眼の少年？が、気になって仕方なかった。

それに最近カード達が騒がしいのも気になるが、別に僕に取っては関係ないと切り捨てすぐ櫂をどうしようかで頭が、一杯だった。

気紛れにいつもと違う道を歩きたくなった。

別に理由なんて無い、そう、ただ何となくカードの声が、したからだ。

案の定カードの声を頼りに道を抜けるとさっきまで自分の頭を悩ませていた少年…そう、名前は確か…………。

「先導…アイチ」

名前を言ってみて僕は、眉間に皺が寄るのを感じた“似合わない”。それが雀ヶ森レンが出した結論だ。

先程からアイチはびこうだにせず自分より虚ろいな瞳で行き交う車を眺めていた。

レン自身別に少年に興味が、ないしどうなろうが関係ないが、その

反対に權を見て表情を緩めた。

「（ふふ、また合ったね。やっぱり君は僕から逃げられないんだよ）」

僕が、笑い權に近づくため足を踏み出したと同時に酷い頭痛が、レ
ンに襲った。

「……っ！」

痛みのあまり思わず方膝を付くと脳内に光輝く美しい翼を持つドラ
ゴンが、気を失っているアイチに抱えこちらを睨み付けてた。

「君だね。さつきから僕を呼んでいたのは…ソウルセイバー・ドラ
ゴン」

（我は汝を呼んだ覚えはないぞ？呪詛位は言ったが…）

「……………」

（そんな話しは良い。貴様は我らが、マイヴァンガートを傷つけた
…その罪を償うために呼んだ）

「罪？何の話しだい？？」

僕が、心底分らないと首を傾げるとソウルセイバー・ドラゴンは
忌々しげに睨んだままだった。

（貴様のパートナーとは話しをつけてある）

「パートナー？」

僕が、不思議そうな顔で目の前のドラゴンを見ると空いている手を素早く僕の頭を撫でると何事も無かったかの様に見下ろしていた。

「貴様の力…罰として封じた。二度と使えないだろう」

「なあ！！」

驚く僕をよそにドラゴンは、僕を冷めた目で見下ろすと一言告げて去ってしまった。

気がつくと僕は、道路側に立っていた。夢かと思っていたが、目の前の光輝く羽に夢でないと告げていた。

（力を返してほしければ連獄の竜の主と貴様の暗黒竜をつれ？？？公園に來い）

1話 滅竜魔導師と先導者（前書き）

一度に二本投稿だと！？

今までの作者にはあり得ない奇跡です……！

（内容がへボいんじや意味ねえよ。by通りすがりの火竜）

地区大会だと書きましたが、まだアイきゅんが、目覚める前の話しだと思ってください。

それとさだ…レン様を登場させましたが、まるつきり別人です。

ある理由からアイきゅんと櫂が、大切な存在になります。憎悪↓曲がった愛と言う感じです。

次からは精神的に弱り心を無くしかけたアイきゅんが、出て来ます。

・追加

二人が、アイきゅんの心を取り戻してもまだ終わりません！

聖竜が、二人を送った理由は主の心を取り戻す事。終焉のドラゴを呼び寄せるあるギルドを倒すため。

詳しい内容は話しが、進むにしれ分かってくると思います。

（無茶苦茶な設定だな。流石名前の通りだ。by厨二病）

1話 滅竜魔導師と先導者

魔法が、当たり前前に存在する世界、フェオーロ王国。そこにマグノリアと言う町があり各自に依頼を受けこなす魔導師ギルドがあった。問題ばかり起こす魔導師ギルド、フェアリーテイルに所属している桃色の髪の少年がいた。

「マカオそれは本当か!？」

「おう、間違いねえぜ」

「やっと…やっと、これでイグニールに会える!」

嬉しそうに笑う少年に翼をはやした青い猫も嬉しそうに笑った。

「あい!良かったね、ナツ」

「おう!」

「騒がしはよハッピー!」

「ナツさんどうしたんですか?」

自分たちの隣で騒ぐナツたちにシャルルは呆れるが、ウインディーは気になり理由を聞いた。

「何でもマカオが、三体のドラゴンをこの街から向こうにある森で見たんだって!」

「ドラゴンを三体も!!」

「早速だけ行って見ようぜ!」

「うん!」

頷くウィンディーにナツはニカツと笑い二匹の猫も連れいざ向かわんとしたときにガジルが、止めた。

「おい待てナツ。またガセじゃねえのか? そんな曖昧な理由で行くなんざ時間の無駄だな」

「何だとガジル! お前もメタルカーナに会いたくないのかよ! ?」

「……………」

「ちい、勝手にしろ。行こうぜウィンディーにハッピーにシャルル」

「ああ、待つてくださいナツさん! カジルさんもごめんなさい」

「ちょっと待ちなさいよ! あんたウィンディーの体力も考えて走りなさい! !」

「シャルル、ナツ何かほつといておいらとデート…」

「うっさいはよハッピー! これ以上ふざけたこと言つと雄猫と言つわよ! !」

「ええ〜! ! 酷いよシャルル〜! ! ?」

そんな騒がしい二人と二匹が、消えたのを見てため息をついた。
そんなガジルにミラーが、いつものにやかな笑顔で近づいて来た。

「大丈夫よ。何だってナツがいるんですもの」

「それが、心配なんだよ！」

再びため息をつくカジルにミラーは笑顔を崩すことは無かった。

ギルドから離れた森にナツたちはいた。

「（くんくん）…こっちだ！」

「本当でしようね？無駄にウィンディーを歩かせただけならただじやおかないはよ」

「シャルル怖い」

「お、落ち着いてシャルル。（汗）ナツさんの言つとつり確かにドラゴンの匂いはします。ですが…」

言葉を途中で遮ったウィンディーを不思議そうに見たシャルルとハッピーだったが、ナツの言葉に二匹は視線を向けた。

「…匂いは確かにドラゴンだけどどちらかと言えば人間に近い匂いがする…しかも人間の匂いもするんだ」

「あんた人間じゃないの？」

シャルルの言葉にナツだけでなくウィンディーも辛い様な… だけど誇らしげな表情をしていた。

「私たちは幼い頃にドラゴンに育てられたって言ったでしょ？だから魔法も身体能力も寿命も魔導師の… ううん、人間の軸からはみ出しているのよ」

「ちなみに寿命の方はドラゴンの血を飲むことによって長寿になるし年もあまり取らないしな」

ウィンディーとナツの言葉に衝撃を受けた二匹は無言になりナツたちもあまり触れたくない内容なため暫く無言な空間が、出来ていた。

「ここだ」

ナツたちが、森を抜けると1ヶ月前には無かった大きな洞窟があった。

「うおおい！イグニール！！」

「ナツさん、まだイグニールさんが居ると決まったわけじゃ…」

ナツを止めるウィンディーに洞窟から腰まである血の様に赤い髪に赤い瞳をした美しい青年とこれまた横に跳ねたミルクティー色の髪に孔雀石の瞳をした美しい青年が、無表情ながらも不機嫌な顔で楽しそうに話す赤い髪の青年と出て来た。

「櫂、いい加減僕の下に帰らないかい？」

「くだい。貴様という位ならアイチと一緒に死ぬ」

「なら、僕は櫂とアイチを殺して一生愛でるよ」

「死ぬ。魔物に喰われて死ぬ」

「君たちが食べるんなら僕、死んでも良いよ？」

「……………」

何とも言えない会話をしている二人にウィンディーたちはうろたえているが、ナツだけは近寄りがたいオーラを放つ二人の元に向かっていた。

「なあなあ！お前らイグニール見なかったか！？」

「ナツさん！！」

「待ってナツ！」

「ちょっとウィンディー！そいつらはどうなったって良いけど赤い髪の男には近づいちゃ駄目よ！！」

いきなりのナツの登場に驚く二人を他所にウィンディーたちは急いで近づくの気づいたさつきまで楽しそいに話していた赤い髪の青年はきよとした瞳でナツを見た。

「…僕はイグニールではありません」

「ちげえよ！イグニールはドラゴンだ！！」

「ドラゴンだと？では、貴様が火竜サラマンダーのナツか？」

「そうだけどそれがどうし…」

しかしナツが、最後まで言い終わる前に顔すれすれに横切った黒い炎に気づき慌てて後ろに下がった。

「うわぁ！？」

「きゃぁ！大丈夫ですかナツさん！！」

「てめえいきなり何しやる！！」

いきどわるナツに駆けつけたウィンディーたちも黒い炎の元を辿るとさっきまで自分たちを見ていなかったレンの両手に黒い炎を纏っていた。

「君たちには興味ありませんけど僕たちのために死んでください」

「そう言う事だ。レン、サポートしろ」

「はい」

レンが、飛翔するとカイは腰に刺してあった剣を抜くと赤黒い炎を纏わせナツに切りかかった。

2話 心（前書き）

か、書けた——！

今まで青エクとカテリボしか書いてないので初めてヴァンガードの話を書きますので慣れなくてどうしても最新が、遅くなりがちですみません。

次からいよいよアイチたちはギルドに向かいます！

予告した様にカードを使った戦いはありません。

なぜなら作者が、あまりルールを知らず勢いで書いた話だからです。

時々都合で最新でなくなる時もありますが、よろしくお願いします！

2話 心

洞窟の中に一人の少年が、犬の姿をした毛並みのピンク色と全身ピンクの犬が、心配性に見ていた。

「あいち…」

「あいち…だいじゅつぶ？」

「ういんがる、ふろつがる…僕、疲れちゃた」

力なく微笑むアイチに二匹はアイチの体にそれぞれ体を擦り寄せた。

「そう言えば何か外が、騒々しいんだけど…」

アイチは立ち上がったが、二匹のハイビーストはそれを止めた。

「あいちまだうごいちゃだめよ！どうせわたしたちをつかまえようとしたみつりようしゃでしょ！」

「そうだよ！もしあいちをうごかしたことが、ばれたらはらぐろけんじやにころさるんだよ！！（ぼくが…）」

「ほら、ういんがるもいつてるんだからおとなしくしないとだめよ！」

「わあああ！わ、分かったよ」

「ふん、わかればいいのよ」

「ほんとふろつがるはくちつるさいだろ？ だならばあといわれるんだ」

「なんですって！ だれがおばさんよ！？ そのけをむしってやる！」

「きやいゝゝゝ！！」

「まてごらあ！」

ふろつがるに頭を噛まれ悲鳴をあげながら逃げるういんがるを追いかける姿を微笑ましく見ていたアイチだったが、もうスピードで壁に叩き付けられた人物に目を見開いた。

「か、懼くん！！」

壁に叩き付けられた人物が、懼だと知り慌てて駆け寄ろうとしたアイチを二体のハイビーストが、道を塞ぎさらにいつの間にか沈黙の騎士ギアラティンが、アイチを羽交い締めに使っていた。

「離してギアティン！ 早く懼くんの治療をしないと」

「……………」

「おちついてあいち。あなたのをかりなくともえれいんが、いるでしょ？」

ギアラティンの拘束を解こうと足掻くアイチにふろつがるは諭した。

「そ、そうか！ 世界樹の巫女エレインをコール！」

アイチが、言う足下まである長い草色の髪を二つに分けた女性は、
櫂の方に近づくと両手を組体から緑の光を出し櫂の体を包んだ。

ほつとしたと同時にギラティンが、消えたことにアイチはぎょっと
した。

「ギアラティン!？」

「落ち着いてくださいアイチ様。彼は、ライドした分けではありません
せん。ですので顕現出来る時間も短かったのです」

「それじゃギアラティンは!」

「鍵の中で眠ってます」

「よ、良かった」

安堵したアイチは櫂の容態を見てふらつきながらも立ち上がる姿に
心配そうな顔で見た。

「櫂くん怪我は大丈夫? 痛くない?」

「こんなのかすり傷にもならん」

「櫂くんが、無事なら良かったけど…」

「アイチ?」

暗い表情のアイチに櫂は暫く眺めていた。沈黙が、辺りに広がるが、

アイチは思い口をようやく開いた。

「僕のことは大丈夫だよ、櫛くん。だから関係ないナツさんを僕の事情で巻き込んでしまった事への謝罪が、したいんだ」

「……しかしお前の場合は同じ滅竜魔同士の魔力を貰うことによって体を安定させる。全て手に入れて残っているのは火竜だけだ」

「そうだとっても僕はもう……誰かが……誰かが傷つくのを見たくないんだ！」

アイチは櫛とにらみ合い櫛の無機質な孔雀石に視線を反らさずにらみ合ったが、先に折れた櫛は、深くため息をついた。

一度決めたらけして曲げない意識の強さを知っている櫛だからこそアイチに“希望”を託したのだ。

白の英雄。ブラスター・ブレードノの様になれと。

「おい、かげろうのこぞう！いまのあいちをつれていかせるつもりなの！そんなことゆるさないぞ！！」

「くやしいけどういんがるのいうとうりだは」

「お前たち、アイチの意識を尊重しろ。勝手な屁理屈を押し付けるな」

「なんだと！たかがにんげんのぶんざいでえらそうに。おまえらのせいでぼくらのせんどうしやをつしなうところだったんだぞ！」

「……………」

「ういんがる。きもちはわかるけど、あなたすこしいすぎだは」

もめ始めたハイビーストの二匹におろおろするアイチは助けを求め權をみるが、洞窟の壁に背中を預け自分には関係ないと言うオーラを放ちさらに戦い初める二匹に仕方なくアイチが、止めに入る前に腰に下げてた沢山の鍵の内薄い青色の鍵から小さな賢者マロンが出て着た。

「あれ？どうしたのマロン？」

「アイチ様、ここは僕に任せてエレインを戻してください。いつまでも彼女を出しておくのも失礼ですよ？」

「あわわわわ！ご、御免ねエレイン…」

申し訳なさそうに謝るアイチに“巫女”と言う名にふさわしい微笑を自分たちの最愛の先導者に送った。

「いいえ、アイチ様が、謝る必要はありません。私もあなたを觀察をして収穫が、ありましたから」

「え??？」

アイチはクスクス笑うエレインに訳が分からないと言った顔で見るとただ一人權だけはエレインの言葉の意味を理解し睨むが、彼女は權にもニコリと笑うと消えてしまった。

「ねえ、マロン。さっきのエレインの視線何か変じゃなかった？」

「そうですね？さあここは僕が、何とかしますのでいきなさい」

「…行くぞアイチ」

「う、うん。じゃマロン後はお願いね！」

「イエス。マイヴァンガード」

二人が、洞窟から出たのを確認するとマロンはアイチに向けていた笑顔とは異なる笑みを称え未だに喧嘩している二匹の元に向かった。

「さて、二匹には軽〜いお仕置きをしましょうか♪」

嬉しそうに向かうマロンの脇に抱える本を見ると“魔導書”ではなくなぜか“拷問の全て！（初心者向け）著者アカネ”と書かれた本を抱えていた。

櫛とアイチが、外に出てみると平然としているレンとボロボロのナツの姿に悲鳴を上げる声に気づいた二人は一時戦いを中止しレンは黙ってナツの方に向かうアイチと櫛を見ていた。

「すみませんすみません！僕の連れが、とんだ迷惑をかけました」

ナツたちは戦い中に自分に謝るアイチに呆けていたが、プルプル震えながらうつすら涙で潤った瞳はナツは保護欲。ウインディーは母性本能を刺激する可愛いさだったからだ。

「いや、俺の方こそい攻撃してわりいな」

「所で貴方たちは誰ですか？」

「えとえと……」

「……俺はカイ。こいつはアイチで赤い奴はレンだ」

戸惑うアイチの代わりに答えた櫓に尊敬の眼差しを送るが、櫓本人はいつもの様に見向きしない態度に落ち込む姿は見てる方が、痛々しかった。

「カイ、いつまでもそんな態度でいるとアイチくんに嫌われますよ」

「何だレン、まだ生きてたのか」

「フフフ……僕は強いんだよ。それは君も知っているだろう？」

「……………」

櫓はレンを軽く睨むとアイチの腕を掴みナツたちに来る様に促すとさっさと導洞窟に戻ってしまった。

レンは櫓の態度に慣れてるため軽く肩をすくめるとさっきまでのイキイキとした顔ではなく何の感情が、感じられない無機質な表情でナツたちに謝罪をして彼らを伴い洞窟の方に足を向けた。

3話 誤解（前書き）

原稿が、遅くなつてすみませえん！

前にギルドに行くとききました、都合上次回に回しました。

楽しみにしていた方たちには、大変申し訳ありません。

最近寒くなりましたね。

皆さんも風には、気をつけてください！

また、ネタ切れで行き詰まることもあつて最新が、遅れがちですが、よろしい願ひします。

3話 誤解

アイチたちが、洞窟に着いた時に見た光景に固まってしまった。
二匹のハイビーストたちが、震えながらマロンからできるだけ距離を取っていたからだ。

「……………」

「えーと、どうなってるのかな？」

「あいちー！！」

「うわぁーこわかったよ！！」

「ちよっ！二人ともどうしたの？」

アイチに泣きながら抱きつく二匹を撫でながら座って魔導書と呼んでいたマロンは見ていた本を閉じにこりと笑いながらこちらに向かって来る姿に二匹は震えながらアイチに身を寄せた。

「先ほどはういんがるたちが、迷惑をかけてしまいすみませんでした」

「うっん、僕は気にしてないから大丈夫だよマロン」

「それは良かった」

アイチはにこやかに笑うマロンに笑いながら三個の鍵を出した。

「おお！お前もルイージと同じで精霊を使うのか？」

「ナツ、ルイージじゃなくてルシイだよ」

「あの、二人とも名前間違ってますよ？ルリーさんですよ？」

「全く、頭が悪い雄どもね。それとウインディ、あんたも牛乳の名前間違ってるはよ」

ここにはいない仲間の名前を間違ってる三人にシャルルは、ため息をつくなかアイチは、鍵の力でマロンは少しだけ残りたいと言っ希望に二匹を戻すと、今お互い間違っている名前を言う三人に向きなあった。

「あのー、話してもよろしいでしょうか？」

「ええ、いいはよ」

「実は、僕たちの守護竜が、昨日から帰ってこないんです、何か情報はありませんか？」

「守護竜？」

怪訝な表情をするシャルルにアイチはチラチラと權を見てその目には「お前が、話せ」と書かれていた。

「……はい、僕の竜。センドウ・アイチはそ…セイバーでカイ・トシキくんはオーバードでススケモリ・レンさんはシャドウです」

「色は白、赤黒、黒色の竜です」

「やっぱりドラゴンが、いたんじゃないか！」

アイチの次に言ったレンの台詞にナツは驚愕の表情で二人に詰め寄る様に權は目を細めアイチは少し後ろに下がりレンは不愉快そうにしていた。

「それよりあの犬擬きは何なの？あの少年もここら辺で見ない顔ね」シャルルの言葉に洞窟に居る学者風の服を着た少年は、そんなシャルルににこりと笑いかけた。

「初めましてエドラスのイクシードさん。僕はここで言う星靈にあたる存在でういんがるたちも精靈です」

「星靈？それじゃアイチは滅竜魔導師でもなくて星靈魔導師？」

ウィンディーの言葉にマロンは苦笑いを浮かべながらさつきまで戻っていなかったマロンはアイチの腰に下げていた鍵の中に消えてしまった。

「とりあえずお前らのギルドに案内しろ。その前に貴様の火を少しだけで貰うぞ、アイチに分けないといけないからな」

「それはどういことですか？」

ウィンディーの疑問に今度はレンが、話した。

「アイチの魔法は俺たちと違って全ての魔法を無効にする光のドラゴンから教わった者です。ですから体は、そのために必要な要素が

必要になってくる。ほとんどの要素は手に入れました、後は、火だけなんです…」

レンの言葉にナツとウィンディーは、酷く驚いた顔をするもナツはにかりと俯いているアイチに笑いかけた。

「何だよ、そう言うことなら早く言えよ！火ぐらい別に構わないぜ」

ナツの言葉にアイチは驚き遠慮しようとしたが、レンの笑顔という名の圧力に耐えきれずナツの申しでに承諾した。

「…お、お願いします」

「別に構わないっていったけどどうやってアイチに移すんだ？」

「簡単なことだ。ただ、アイチと手を握れば自動的に魔法は発動される」

「だったら何で私たちを襲ったのですか？」

ウィンディーの最もな疑問に權は言った。

「最近俺たちを捕まえようとする奴らが多くなったからな、お前たちもそいつらの仲間だと思ったんだ」

「何だよその理由は！？」

ナツが、勢どつる気持ちも分かる。

何せ正規ギルドにしてフェアリーテイルの一員だ。

權の発言は家族同然のギルドを馬鹿にした発言だからだ。

「落ち着きなさい、ナツにカイ。まず、アイチに魔法を移してからあなた方のギルドに仮入部させてもらいます。よろしいですか、ウィンディーさん？」

「はい、私のことはさんで呼ばなくてもいいですよ」

「それじゃ行くぜ！」

かけ声と共にアイチの手を握ったナツたちの下から白い魔方阵が、浮かぶとナツの体から火をが、吹き出しその火は握っているアイチの手に伝うと数秒アイチの体を火が、包むと直ぐに消え魔方阵も消えていた。

「ナツさん大丈夫ですか？」

「おう！俺はこの通りピンピンしてるぜ！」

不安そうな顔で近寄ったウィンディーにナツは、何ともないと笑うとほっとしアイチはそんなナツにお礼を言う為に二人に近寄った。

「ナツさん、本当にありがとうございました！おかげで魔法も使える様になりました」

「いいってそんなこと！」

「ナツ！早くオイラたちのギルドに戻る？」

「そうね、ウィンディー。帰りましょ」

「うん！行こう」

二匹の猫の言葉にウィンディーは、頷くとナツとアイチ、カイにレ
ンを引き連れ五人と二匹はフェアリーテイルに向かった。

4話 魔導師ギルドへ(前書き)

地球の皆様よ！おらにネタをくれ！！

4話 魔導師ギルドへ

ナツたちの案内でアイチたちは、魔導師ギルドに向かっていた。

ぎい…。

「よおナツ、ドラゴンはいたか？」

「おりゃ！」

「ぐほお！？」

いきなりのナツの蹴りでぶっ飛んだ中年親父のマカオはすぐさま起き上がるとナツにくっついてかかった。

「何しやがる！情報は渡したろ！？」

「わりい、殴るつもりはなかったけど何か体が、動いた」

「理不尽だ！？」

ギャギャ騒がしくなったギルドに狼狽えるアイチを連れ二人はいつの間にかここにいた皆が、喧嘩しているさまを傍観していた。

「あら、初めて見る顔ね？私ミラジェーンで言つの、ミラでいいは」

「わたしはルーシィよ、精霊魔導師なんだ！」

カウンターの奥から白い髪の女性が、にこやかな笑顔でアイチたちの元に近づきそれにつられて金髪碧眼のやたら胸が、デカイ少女が、挨拶をした。

「初めまして、アイチと言います。赤い髪の方はレンさんで目付きの悪い人はカイくんです」

「何度もいますが、僕のことは呼び捨てでいいですよ」

「誰の目付きが、悪いんだって？」

「ひい！ご、ごめんなさい」

小さく悲鳴をあげるアイチにじやれつく二人を見ていたミラーとルーシー、奥のカウンターにいたガジルだったが、背後から飛んできたグラスが、不幸なことにレンの頭に当たってしまった。

ゴスッ。

「……………」

「…………ぷう！」

「え、と…か、櫛くん…………！」

肩を振るわせて笑いを堪える櫛とそんな櫛を諫めるアイチの隣で誰もが、見惚れる笑顔なのにまがましいオーラを纏い騒動の源にお

もいつきり息を吸い込み。

「奈落竜の咆哮！」

「ぎゃあああああ——……！！！？×全員」

レンの闇魔法が、今だに喧嘩をしている一同に直撃した。

「なんじゃ貴様ら、静かにしない……か？」

奥にいたギルドマスターのマカロフは、ギルドの皆の悲鳴と微弱ながら感じた闇の波動に気づき下に降りて見ると目を回しながら横たわる馬鹿どもと今日、訪れた客人3人と看板娘のミラと二人の滅竜魔導師と猫だけがいた。

「いったいどういうことじゃ？」

啞然としているマカロフにミラはこの惨状に全く応じずにこやかな笑顔でマスターに今日訪れた二人を紹介した。

「……と、言うわけで僕たちが、元の場所に戻るまでの間ここに置かせてください」

「勿論じゃ、わしらはお前さんたをを拒はん！それと……」

マカロフの続けをミラーが、引き継いだ

「ようこそ、FAIRY TAILへ」
フェアリーテイル

アイチたちのこのFAIRY TAILへの生活が、今始まる。

ある空間に色鮮やかな色と様々な姿をしたドラゴンたちが、そこにいた。

「イグニールはまだか」

茶色のドラゴンに答えたのは薄いピンク色のドラゴンだった。

「イグニールなら最近この世界に現れた三体のドラゴンを迎えに行つたは」

「よそ者をこの世界に招くのか？」

ピンク色のドラゴンの言葉に水色のドラゴンは、不機嫌な声音で聞いた。

騒がしくなった周りに皆より少し離れた位置に腹這いの姿で目を閉じていた黒鋼色のドラゴンは、ゆっくりと目を明けたが、すぐに目を閉じてしまった。

「悪い、待たせたな」

入り口にあたる大きな扉の前にゆっくりとやって来る赤色のドラゴン、イグニールの後ろに付いて来る三体のドラゴンに周りのざわめきが、大きくなった。

何故ならどのドラゴンも四足歩行なのに比べ新しく来たドラゴンは

人間のような二足歩行だったからだ。

「イグニール、その方たちは？」

全身を羽と固い鱗に覆われたウインディーネにイグニールの後ろにいた人間の女性の姿に似た光輝く美しいドラゴンが、前に進み出た。

「初めまして、私の名前はソウルセイバード・ラゴンと言います、左隣からドラゴニック・オーバードロードにファントムブラスター・ドラゴンです。皆様の知つての通り私たちはある理由からこの世界に来ました」

光輝く美しいドラゴンの微笑？に雄ドラゴンだけでなく雌ドラゴンでさえ照れる姿にシャドラゴとオバロはむっとした顔を見た。

「貴様ら…我らの女神に手を出して見る、殺すぞ」

「殺すなんて生優しいですね、生地獄を見せてから女神に気づかれることなく始末しなさい」

2体のドラゴンの殺氣に一番早く気づいたソルセバはため息をつくと2体の頭を尻尾で叩いた。

「……っ！」

「痛い！」

2体のドラゴンの悲鳴にソルセバは知らん顔で一番に友達になった同じ滅竜魔導師を持つウインディーネとひさく話す姿を羨ましそうに見る2体に沈黙していた一体のドラゴンが、ゆっくりと近づいて

来た。

「貴様ら、あの雌竜のことが、好きなのか？」

メタルカーナの言葉に2体のドラゴンは、わけがわからないといった顔で見た。

「別に僕たちのこの気持ちは僕たちのマイヴァンガードの気持ちに反映してるからね」

「最初は我らのヴァンガードの気持ちに反映して女神を好いていたが…今は本当の意味で我らは彼女を愛してる」

「……………そうか」

2体のドラゴンの言葉にメタカナはそれ以上言えなかった。

彼らのあの雌ドラゴンを愛してる気持ちが、伝わってきたからだ。

例えギラついた、獲物を狙う肉食動物の目をしていてもだ。

3体のドラゴンの事情を聞いた彼らは“その時”が、来るまで仲間に入れた。

よそ者に反対していたドラゴンたちでさえ…。

「我々の残された時間は後どのくらいだろうか…それまでにはこのような日常もいいかも知れんな…」

イグニールの言葉に答えてくれる者はこの場にいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9036x/>

光の先導者

2012年1月12日13時47分発行